船の夢

内田百閒

ことば

人間の最大の喜びで
んだ書物は、人間の
の天性となり、人格

代のための出版社と
社文庫を刊行する。
古今をつらぬき、文
におよび、いやしく
教養の基盤として、
可及的に多く刊行せ

だけ楽しく、消化し
出版社の義務である。
わが社は、この目的
あえてわが社の志を

赤尾好夫

〔編集顧問〕 小田切進　茅　誠司　竹内　均
外山滋比古　林健太郎　森戸辰男　（五十音順）

旺文社文庫　船の夢　定価はカバーに表示してあります

1982年6月15日　初版印刷
1982年6月25日　初版発行

（乱丁・落丁本はお取りかえしますので本社に直接お申し出ください）

著者　内田百閒（うちだひゃくけん）
発行人　赤尾好夫
編集人　雨宮良夫
印刷所　新興印刷製本株式会社／合資会社 中村印刷所
製本所　有限会社 穴口製本所

発行所　株式会社 旺文社　電話（編集）03-266-6372（販売）03-266-6415
162 東京都新宿区横寺町

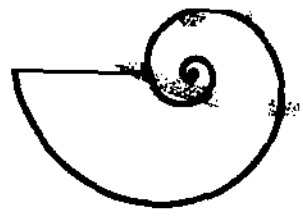
0193 613-08 0724　205028
Printed in Japan

©内田こい　1982
（許可なしに転載，複製することを禁じます）

旺文社文庫

船の夢

内田百閒著



旺文社

船の夢　目次

流民　九
岸壁の浪枕　一三
新造　二〇
出船の記　二五
人の顔　二九
竹橋内　三三
尾長　三七
玄冬観桜の宴　四〇
葉蘭　四五
麻姑の手　四七
一病息災　四九
荒手の空　五七
大和丸　五九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

東支那海　六五
屏東の蕃屋　六八
小列車　七一
砂糖黍　七四
時　化　七六
基隆の結滞　七九
簾　戸　八五
机　八九
道楽のすすめ　九一
新田丸座談会覚書　九三
船の御馳走　九六
門司の八幡丸　一〇一
婦人接待係　一〇四
砂糖袋　一一〇
蟻と砂糖　一一三

バナナの菓子　一二四
カステラ　一二六
紅茶　一二八
海苔　一三〇
山火事　一三三
不心得　一三七
門松の風　一三四
柳撿校の小閑　一三六

「船の夢」雑記　平山三郎　一七七

〔編集部註記〕かなづかいは原文のままとした。漢字は正字体を新字体・略字体にあらためた。ただし、人名・地名をはじめ、漢字の一部を正字体とした。

船の夢

流民

沙市(シャトル)航路の日枝丸が神戸港を出て、立秋前夜の熊野灘にかかる時分から若い西洋人が二人肩を押し合ふ様にして甲板の手すりに靠(もた)れたり、きよときよとと人の顔を見返りながら歩き廻つたりした。

その晩はただ二人の姿を認めただけで、別に気にも止めなかつたが、翌朝名古屋に著いてから新たに乗り込んだお客もあり、甲板の上が少しざわついてゐる時、又その二人連(づ)れの西洋人が目についた。明かるい所で見ると、一人はのめつとした顔で脣(くちびる)が女の様に赤く、一人は顔の寸が詰まつて、青黒く生(は)えかかつた鬚(ひげ)の上に何だか白い粉を一ぱいまぶしてゐる。ひげ剃りの石鹸を塗つた儘(まま)出て来た様で甚(はなは)だ見苦しい。夕方近く迄碇泊してゐた間ぢゆう出て来たりゐなくなつたりしたが、一等船客ではなくて、どこか外からこちらの甲板に出て来るらしかつた。

初めの内は外(ほか)に相手もなく二人だけでぼそぼそ話し合つてゐたが甲板が少し賑やかになつた間に、日本人の客の中にも話し相手を造つた様である。船中で知り合つた私共の仲間の一人も相手に

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

つかまつたと見えて、後であの一人は波蘭人であり、もう一人の顎に白い物をくつつけてゐるのは維納生まれだと云ふ話を私共に傳へた。

日枝丸は一日ぢゆう名古屋港に沖泊りして、立秋の波に浮いたなり動かなかつた。波止場を往復するランチに乗つて上陸する人人もあつたけれど、若い西洋人は二人共ぼんやり手すりに靠れて向うを眺めてゐた。或は一寸市中を見物して来ると云ふ様な、さう云ふ勝手は出来ないのかも知れない。私が同行した大学の辰野博士と二人でデッキチェヤにくつろいでゐる前を通る時は、一一こちらを見て会釋する様な、しない様な顔をするし、そこいらを歩き廻つてゐる時出くはすと、一寸道を避けて、その拍子に何か云ひ出しさうな様子をする。辰野博士の方は何でもない事に違ひないが、私は学校の教師をやめて以来外国人とのつき合ひもなく、その以前の私の語学だつて自分ながら少しも信用してゐない。教室の中で学生を相手にする時だけ尤もらしく通用させた教師用の独逸語に過ぎない事を承知してゐる。そんな物を引つ張り出して来て、妙な顔をした西洋人に構つてやる気もしないし、うつかりした愛想笑ひでも返して向うから慇懃を通じられたら事面倒だと考へたので、成る丈ふりふりしてゐた。

夕方に抜錨して間もなく波の上が暗くなり、晩餐の食卓で麦酒を飲んだ。席を離れて甲板に上がり、向うの方で明滅する燈台の明かりを眺めてゐる内に、自分の御機嫌で気がゆるんだのか、いい潮時を向うに捕へられたのか解らないが、いつの間にか二人の西洋人の相手になつてゐた。錆だらけの独逸語を話して自分で気が引けるとも思はなかつた。二人は頻りに日枝丸を褒め、水明かりに輪廓が浮かび出てゐる対岸を指して日本の山の姿を褒め、水の色を褒めた。私が云ひ出し目で麦酒

に招待する事になつた。バアのテーブルでは辰野博士の本物の佛蘭西語とこつちの若い仲間の英語と私の独逸語とで取りとめもない話しが段段面白くなつた。相手はどの国語にも答へて、上海に過ごした二年の苦労を談り、大概の病気なら上海で間に合ふと云つて、病気の名前を五つ六つも続け様に唱へたが、病名の語尾に韻を蹈んでゐる様な調子で云ふのが面白かつた。

がやがや話し合つてゐる間に私が煙草を吸はうと思つて、ポケットに手をやるとすぐに自分の持つてゐる両切を薦める、燐寸を擦らうとすれば忽ち向うでしゆつと火を出す。間髪を容れずと云ふ気の遣ひ方で仕舞にはこちらの気持までいらいらした。

二人共紐育へ行くのだと云つてゐたけれど、行く先に希望を託してゐると云ふ風でもなかつた。脣の赤い方は様子が憐れつぽく、顎のきたない方は無暗に遠慮をしてゐる様で流亡の民と云ふ感じが争はれない。いい加減で切り上げて立ち上がり、途中で脱いだ上衣を引つかけようとすると、二人が争ふ様に私の上衣を取り上げて、両方から著せてくれた。

一晩寝て目がさめると日枝丸は清水港の朝凪ぎに錨を下ろしてゐた。部屋で朝の支度をしてゐる間に昨夜の二人の事を思ひ出したが、今朝考へると餘計なおせつかひをしたものだと云ふ苦苦しい気持しか残つてゐない。これから甲板へ出て行けばきつと二人が待ち受けてゐて何か云ふであらう。面倒でもあり、第一、夜が明けて見ると独逸語など一言も思ひ出せない様である。

大分後になつて結局甲板へ出る事は出たけれど、その二人には会釋だけして成る可く相手にならぬ様に心掛けた。一晩の内に随分不機嫌になつたと思ふかも知れないが、愛想よくしようにも今朝は独逸語が咽喉から出て来ないのである。そんな事も云はれないから止むを得ず後はむつとした顔

ですませた。

横濱へ著く前に、東京迄行つて来るには幾らかかるかと云ふ事を頻りに尋ねたさうである。私共が岸壁に下りてタクシーのゐる方へ歩いて行く片側の、舳先から引いて日枝丸を繋ぎとめた太い纜に寄りかかる様に二人が起つてゐた。どうするつもりか知らないが、さうしてゐても影が薄い。名前も聞かなかつたから、その内に私も二人の事を忘れて仕舞ふだらう。

岸壁の浪枕

冬の日の短かい時ではあつたが、横濱を正午に出帆する船に東京の市中から馳けつけて間に合はぬと云ふ法はない。普通の人ならだれでもさう思ふであらうし、私もさう思つた。朝起きてからの日日の順序に手間がかかるにしろ、支度を急げば行かれる筈である。しかしその急ぐと云ふ事が一番いけないのであつて、今までの長い間の経験によるに、急いだ後は必ず妙な事になる。それも家にゐて、毎日の同じ事を繰り返してゐる中の一朝だけであつたら、まだ波及するところが少いが、これから幾日かの船旅に出ようと云ふその最初の日の朝、ばたばたと支度を急ぐ事はよろしくない。急がない事にすると、寝床を離れてから玄関を出る迄に毎朝三時間半かかつてゐる。それから横濱の埠頭へ著く迄に少くとも一時間半、或は二時間は見ておかなければならないだらう。正午前に右の五時間半のゆとりを取る為にはまだ薄暗い六時半に起床する事を要する。目がさめて起きるのなら六時半でも真暗の五時でもかまはないが、後の時刻に辻褄を合はせる為に起こされるのは困る。無理をして起きれば気分が悪い。それは私の我儘とは別問題である。

十年許り前、学生航空の飛行機に夢中になつた当時の事を思ひ出した。毎週日曜缺かさず立川の飛行場へ通つたが、練習機を飛ばせるには朝早い程気流の工合がいいと云ふので、夜半の二時三時

に起きて、暗い内に家を出た。夏はらくであつたけれど寒中でも怠ける様な事はなかつた。当時は朝の支度も今より少しは捗つた様である。その頃の元気はもうないのかと自問すれば、ないと答へる事が出来る。十年たてば赤ん坊が小学校の生徒になり、齢の傾いた連中は大概片づいてしまふ。私と雖も十年の間に歳をとり何事にも無理をして通すと云ふ進取の気象を失つた。飛行場通ひは後後までも私の身体にさはつて、勢ひにまかせるものではないと云ふ経験を残した。朝起きてからその日の活動が始まる。起きない前から豫定があつて、時間が限られてゐると云ふ法はない。

勝手を云つてすまないが、当日出帆までに上船する事は自分に取つて甚だ困難であると思はれる。前日の夕方から船に入り、船中に寝て翌日の出帆にそなへると云ふ事にお計らひを願ひ度いと郵船本社の船客課へ申し入れた。

船では邪魔ッ気なおやぢがまぎれ込んで来て、仕事前からうろうろされてはやり切れないと思ふに違ひないと私自身で考へた。

船客課の係からの返事によると、前日から船に乗り込む事は差し支ない。しかし、航海中の碇泊であつたら萬事普通の通りに運ぶのであるが、今回は鎌倉丸がドックから出て来たばかりの所であつて、船中に残つてゐるお客は一人もゐない。ボイ達は未だ任務に就いてゐないし、食堂も本式には開いてゐないだらう。簡単な用意なら出来ない事もないが、晩餐と云ふ事になると色色手違ひがあると思はれる。さう云ふ事を御承知の上なら前日に入船せられても構はないと云ふのであつた。

人より一日前にもぐり込んで御馳走の独り喰ひをしようと云ふ料簡ではないから、右の通り有り難く承つた。暗くなつてからでは岸壁の足もとがあぶない。明かるい内に上船するとすれば、ど

うしても晩飯の事を考へなければならぬが、初めは一たん船に落ちついた上で、又夕方に横濱の町に出て食事して来てもいいと考へたけれど、それも面倒である。行きがけに汽車辨当を買つて行つて船室で食べる、もともと好きな物ではあるし、それが一番簡単であるからさうきめた。

右の外に、年来の習慣で晩飯の際には麦酒が飲みたい。それも面倒なら家から下げて行つてもいい。そんな事を本社で話したところが、麦酒ぐらゐならお間に合はせる。御自分の部屋で飲んでくれるなら、豫め入れさせておくが、幾本用意しようかと云ふ事なので、これこれで結構である。しかし経験によるに、独りで飲んでゐると初めの内の微醺が内攻して内訌を起こし、思ひもよらぬ妄想が湧き立つて、眼底に未見の山川が自ら相映発し、応接いとまあらずと云ふ様な気持になる事がある。或は手許のコップを眺めてゐる内に自問自答が果てしなく続き出して、仕舞には何処で打ち切りにすると云ふ当てもなくなる。さうすると、つい飲み過ぎてしまふ。動かない船の船室の中に独りで杯をあげると、そんな事にならないとも限らぬから、用心の為もう一二本まして用意させて下さいと頼んだ。

まだ何日も前の事であつたから、その後も本社へ出てゐたが、或る日船客課の広い部屋へ這入つて行くと、向うの方から私の名を呼ぶ声がした。丁度いい所だ、今横濱の鎌倉丸から電話があつて、麦酒の件は承知致してその様に計らつておくが、何麦酒がいいのか聞いておいてくれとの事であると云ふ話なので、恐縮して人中ではあり辺りを見廻す様な気持になつた。

友人の吾孫子検校がさう云ふ大きな船を見に行きたいと云つた。盲人に見えはしないけれど、船まで来れば気分を味はふ事は出来るだらう。それで同道する事にしたが、外にも一緒に来ると云ふ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com